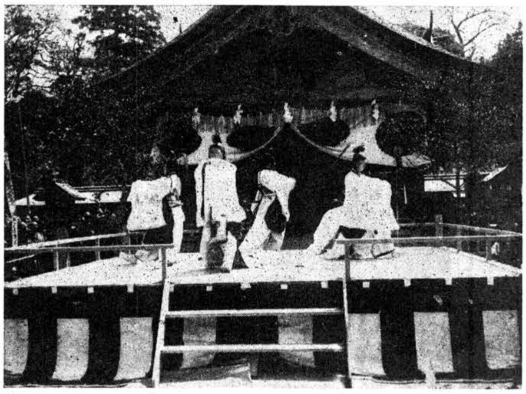
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
定価 一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園二一―三一（〒八一二）
電話福岡（〇九二）六五一―九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一―三三四一（代）～四番
三五一―一三三四・六〇六六番

宗像大社主基地方風俗舞 保存会結成される

―主基地方風俗舞誕生五十年を迎え―



去る三月二十六日、かねてより準備委員会を設け、協議されていた「主基地方風俗舞保存会」の結成総会を開催した。

特に本年は、今上陛下におかれては昭和三年に御即位の大礼を行なわれてより五十年を迎えられるめでたい年にあたり、主基地方風俗舞誕生も五十年を迎えるよき年でもある。

この主基地方風俗舞は当時宮内省楽部の要職にあった多忠朝氏により作舞作曲されたもので、昭和四年同氏は特に下県の上、地元青年団に相伝、指導された。

昭和五十年秋に明治神宮に於ての神楽発表会には同氏長女多静子氏により特に主基地方風俗舞が奏され、関係者多数に深い感銘を与えた。

これを契機に保存会の気運は高まり、今日の発会式を迎えた。

この保存会の活動については、後継者の育成を始め、文化財指定の実現、正しい姿を後生に伝承し、永久保存を目的とすべく今後の活躍が期待される。

趣意書

宗像大社春秋の例大祭に奉納されている主基地方風俗舞は昭和三年今上陛下御即位の大礼に際し主基地方御治定の光栄に浴した福岡県下の風俗歌を基にして特に作曲作舞されたものであります。

宗像大社ではこの記念すべき神楽舞を末永く後世に伝うべく翌昭和四年に主基地方記念会を設立し、特に宮内省より「主基地方風俗舞」として御下賜いただきました。

爾来宗像大社では毎年神前に奉納され、選ばれてこの舞を奉仕することを無上の光栄として多くの氏子青年により連綿と受け継がれて参りました。

しかし乍ら未曽有の大戦勃発、そして終戦と激動する世相の変遷とともに一時中断のやむなきに至りました。

が、昭和二十八年関係者の御努力により風俗舞復活協議会が設けられ、この年の秋の大祭には戦後初の主基地方風俗舞が神前に奉納され、ここに厳かによみがえりました。

その後今日迄地元青年団の奉仕により伝承保存がなされておりますが、この舞は主基地方風俗舞として我国で現存する唯一の神楽舞であり、貴重な文化財であります。

その伝承はひとり青年団のみに依存する事なく、広く一般の方々にも御認識、御理解を得てこの麗しい我国固有の手振りを将来に保存していきたいと念ずる次第であります。

以上の趣意に御賛同いただき格別の御協賛を賜りますようお願い申し上げます。

会則

第一条 本会は主基地方風俗舞保存会と称し、昭和御大礼に奉奏の主基地方風俗舞を永久に伝承保存するを目的とする。

第二条 本会は事務局を設け事務局は宗像大社社務所内に置く。

第三条 本会は歴代の舞楽奉仕者を以て構成し、舞楽部員以外に本会の趣旨に賛同するものは本会の会員になる事が出来る。

第四条 本会は目的を達成する為に左の事業を行う。
1 宗像大社春秋大祭に奉納
2 後継者の育成
3 舞楽部員は必要に応じ視察、見学等の研修を行う。
4 其の他必要なる事項。

第五条 舞楽部員及び会員は前条事業運営の為の経費として年会費（壱千円）を納入しなければならない。

第六条 本会は左記の役員を置き、会長、副会長は会員の内、適任者を会員の推挙によって定める。但し任期は三年とし再任を妨げない。
1 名誉会長 一名
2 会長 一名
3 副会長 一名
4 監事 二名
5 支部長（各支部一名）
6 事務局長 一名
7 顧問 若干名

第七条 顧問は本会に功労があり、且つ斯道に経験豊富なる人を役員会に於て決め、会長がこれを委嘱する。

第八条 本会の総会は通常年一回とし、会長は必要に応じ役員会を随時開会し、会務の運営について協議する。

第九条 本会の運営は会費及び寄附金、補助金を以ってする。

附則
1 本会則は昭和五十三年三月二十六日より施行する。
1 会則を改正する場合は総会の決議に依る。

役員名

名誉会長	葦津嘉之
会長	田中富樹
副会長	嶺　作平
仝	岩佐昭正
監事	中野利三
仝	中野行雄
多礼支部長	花田清己
田島 〃	深田　仁
深田 〃	福崎昌昭
牟田尻 〃	鎌田国利
吉田 〃	岩佐安美
事務局長	神島　定
顧問	亀井　光
仝	伊豆善也
仝	花田新太郎
仝	多　静子
仝	高橋半三
仝	福崎俊輔
仝	葦津国彦
仝	宇都宮弴

論説

豊作を嘆く瑞穂国

わが古典に見える豊葦原瑞穂国なる国名には、年毎の五穀の収穫特に稲作の良好を祈る国家的願意が含まれている。豊作祈願を国名に現わした精神は、実りの秋を神々と共に喜びたい農本国の信仰とも言うべく、他国にその信仰は少い。その瑞穂国日本に「誠に困ったことには今年も豊作」と、食糧庁の官僚が、昨年確定収穫量の数字を挙げて当惑振りを公表する時代変化、まさに史上最高の非常色である。もう瑞穂国の豊作の祈りはあってはならない。官僚に史上第五位の収穫記録を嘆かせてはならないという事になる。

毎年二月祈年祭を厳修して後、水害虫害を除ける祈願祭など伝統の季節には、国家も農民も欠かすことなく豊作を祈り続けた。作柄の反収記録の良好を嘆き指数不良を歓迎するとは、驚きに価する変調時代の到来である。

有史以来、不作に泣いた年はあっても、豊作に困った年は聞かない。毎春農耕開始に先立ち二月に執行した祈年祭は、実に国家的の豊作祈念の大事で、古くは延喜式の神祇条項にも法規制度とされていたのである。第八巻には主要諸祭儀の祝詞まで法制化されていたが、巻頭第一に祈年祭の祝詞が挙げられ「手肱に水沫かき垂り、向股に泥掻きよせて」と水田の泥濘に働く農民の労苦を表現しているほど、豊作を祈る祈年祭こそ安易に取扱われてはいなかった。

武家政治に移ってからも、農耕収穫は政治の重大関心事に変りはなく、漸次複雑化する社会経済の中で農収は中核的役割を持っていたことに変化はない。殊に江戸時代の藩政が農民を支配した世情は、比較的時代が新しいので資料も少くない。田舎の端々まで農民の耕作祈念は、鎮守の森の堂塔に絵馬となり神具となって受け継がれ、神楽をはじめ種々の行事となって残されている。

巷談や記録によれば、農耕の成績如何が多くの悲劇も生んだ。天保の飢饉には万余の餓死者を出したが、天候や水害虫害の甚だしい年は、老人を野山に捨てて食糧の消耗を節した。粟稗はもとより草根まで食ったのである。

藩領が異れば、有無相通じて助け合う応急処置など考えられず、どんなに不作でも役人の年貢米上納は各地とも厳しかったようである。その為に農家の子女の身売りなど、弱い農民は不作に泣きそして自殺の惨事にまで追いやったことは、単に演劇に残るだけではない。佐倉宗五郎の義民伝は、貧しい農民が不作に餓死する窮情を黙視するに忍びず、農民直接の支配者だった庄屋の反発であった。

封建制度を打破した明治の新政になってからは、律令の精神に還れと延喜式の法制が復活して、農耕祈願は国家的行事の中に加えられ、二月の祈年祭も復活したのである。この祭儀に地方長官が官国幣社に献幣する行事は、終戦後官選知事の廃されるまで守られて民主政治がこれを拒否するに至った経過は、国民の現実に知るところである。

さて、昨五十二年度産米の史上第五位の豊作が、何故に長い国民の挙国的念願の習俗とは全く反対に、官僚をして困ったことだと言わせる理由は、ここに説くまでもない。わが国一国だけの経済でなくなった世界的物産交流の事情が厳しく影響するからである。

当局は本年は昨年以上の減反政策を公示するに至った。既に耕作の機械化が進み、化学肥料や農薬利用の技術が浸透した今日、昔の反収に減ずる手はないので、減反政策となるのは当然である。

この順調な収穫が、今秋には政府在庫米を四百六十万トンの莫大量に積み上げる。古米処理を、食糧庁が重大な問題を発表して、米の生産調整に積極的になってきたのは当然の帰結であろう。

九州の一角には、以前から薬品に汚染されて作った稲の食糧にならない水田がある。この水田に毎年食えない稲を作っている。目的は出来た俵数に当局が金を出すからで、金儲けだけの水田とは政策も狂っており、作る農民の労力も無駄と知りつつの愚挙である。

では、もう祈年祭はじめ農耕の祭儀は無用か、祈念は反国策的か。否、世界経済の影響がどうあろうと、黒字減らしの海外食糧の輸入が米麦を圧迫しようと、秋の初穂を神前に奠供して伝統の行事を絶滅させない精神は生かさねばならない。瑞穂の国柄は、政府の拙い外交や政策より以前に、厳として存在している。

阿蒙少言

陽春の好季、長い冬を風雪に過して自然界は一斉に一陽来復の恵沢に蘇る。黄道吉日の神社、結婚式場を持つ料亭、何組かのカップル祝福の花模様が繰り広げられる。めでたしめでたしの幕は、降されるのではなくて開く段取り、人生の新しい門出という◉知人の娘が結婚したので、祝品を送っていた処、お礼の挨拶状が到来した。新郎新婦が野花の草むらに楽しく憩う写真入りの葉書、高砂思想の古い頭は奇異と見るかも知れないが、当世流は驚くこともあるまい◉それどころか、遠く海外の聖地に飛んで、駐在の日本大使館高官を参列させての挙式。厳粛な新生活への船出 交わされた堅い誓い、そんなものは言葉のアヤだけで、真実ではない。その真実は必要ないのだろう◉線香花火を打ち上げたように、派手に見せたらよい、知人同輩を羨ませたらそれで十分。「嫁しては夫に従え、生家があると思うな」と、そんな教訓は今日もう遠くへ消え去った。それでよいのか、よくはないの声がある◉二百海里時代、経済面はじめ芸術文化技術、何でも世界一流国の水準を凌ぐほどの進展の外に、離婚率もまた一流になった現状を統計が発表する。特に最近は女性からの離婚訴訟が激増した。昼夜を問わず四分間に一件ずつの夫婦別れ、結婚前から今度は何年先に別れるかを腹の中で予定するのもあって、簡単に描かれた絵は簡単に破れるが道理◉訴訟に必ず賠償が絡む「金さえあれば」のエコノミック・アニマルに、モラルの確立などを説くのは無理「聞く耳は持たぬ」と冷笑する連中が多くなった◉然し、これでよいと思う者もあるまい。精神家信仰者と尊敬される人物の家庭に、離婚沙汰の多いのは稍々奇妙。尊敬される人物とか指導者ではなくて、敬遠される偽者か。（白雲）

第三〇二回 宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

福岡　吉田春子
今日よりは暦の日数一日づつ消して待つらむ吾子帰るまで

戸畑　田中ハツセ
人気なき公団アパート暗闇に等間隔に小さき灯ともす

福間　宮木勝弘
盆栽に紅梅の花美しくわが手作りの労をかみしめ

宮田　片山一
庭松の緑に積みし雪解けは芝生に落ちて音の聞えず

宗像　中村幸
たくましく群立ちゐたる日のありき背高泡立草飄々となびく

武丸　原田まつ代
幾年前刺木せし椿のピンク花冬枯れ庭に小春日吸いつ

須恵　早川ふさ
つぶやきに似た吾が歌う早春譜縫針の糸通しかねつヽ

福間　広渡一寿軒
ビルの屋根のかげに残れる雪も溶け滴る音に春を感じぬ

田熊　今村重刀
明けやらぬ別府の出湯にひたりつつ夢心地なり湯気たつ中に

田熊　吉田直志
冬空は春一番に消え去りて日ごとに温む水の冷さ

鐘崎　村田四郎
久びさに会いし戦友の挙手の礼たかきは禿をかくすしぐさか

八幡　安川浄生
はるばると流人の島に渡り来ぬ道幅せまき漁師街五十戸

徳重　石松や寿子
弥生式土器の出できし裏庭に今宵も澄める月を仰ぎ見る

福岡　吉田信夫
機上より見下ろす瀬戸は春凪ぎて水尾を曳きつつ船ならびゆく

箱崎　吉村三郎
金港の磯辺歩けば灰の砂波音さやけく千鳥鳴きゆく

香椎　桜井ッ子
水脈長く航く貨物船にまつはりて鴎ら白しぐるる海峡

田島　吉武武雄
馥郁な梅花に和して焼餅の茶屋の端居に足をとどめむ

東郷　田中春子
頑なの夫に向ひて幼な孫は厭だからいやと言ひ放ちをり

福間　二宮未子
ゆけむりにかすむ霧氷の美しくいてつく道に足を取られつ

大島　越智治子
海道の真中にありし島なれば古人もかじよこたえぬ

出口　谷口礼子
甍瓦赤瓦またきらめきて早春の陽は波に沈みぬ

田久　橋本良輔
思い遣る心はあれど得てしてのけはしき言葉に人離れゆく

曲　天野トモヱ
節高のわが指褒めし友も逝ききクラス会案内をその手で受くる

古賀　吉武邦夫
段畠の草の茂りに吾妹子を抱きつつみし海碧かりき

津丸　松尾豊
供出の強権に怯えし農に又米減反の割当てわななく

田熊　鷲津かつ代
節句潮渦巻きとよむ伊の浦の瀬戸は恋ひつつゆくこともなし

池田　永富臻
暮れかかる霊宝館に見てゐたり釈迦の生るる仏誕生図を

原町　八波五月
神を敬い孝子節婦を世に伝ふ叔父の書も早や古き思想か

田久　立花勇雄
たまさかの一人もたのし寝る時も歌書を手許に真夜さめて読む

田久　小方実
老人会の旅にありつつ減反に苦しむ吾子の折ふし浮ぶ

（三面に続く）

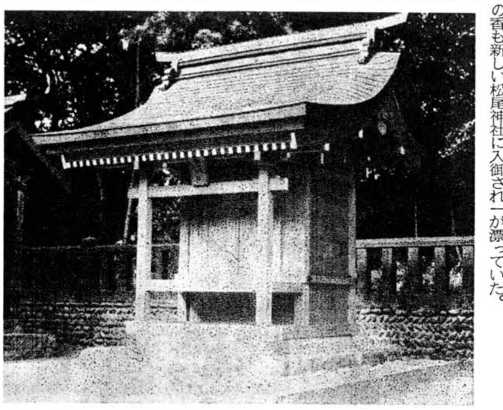
中津宮末社
酒の神 松尾神社造営なる

宗像大社中津宮境内に鎮座する末社松尾神社が去る二月下旬に再建竣功し、翌三月四日、五日の両日に亘って、遷座祭、奉祝祭が厳粛に斎行された。

三月四日午後八時、中津宮境内の全ての灯りが消され、漆黒浄暗の内で、先ず末社国玉神社で仮殿出御祭が斎行され、同社に奉安されていた松尾神社の御霊代は、養父祢宜、太田権祢宜奉仕により木の香も新しい松尾神社に入御された。浄暗の内を蔭灯の雪洞が一つ静かに動く様は印象的であった。

この後、境内の灯りを一斉に点灯、松尾神社々前には海の幸、山の幸が山の如くお供えされ、鎮座祭が斎行された。

翌五日、松尾神社遷座奉祝大祭が午前十一時より斎行された。陽光に、お屋根の銅板が輝き、白木の社殿は簡素で神々しく、詣でる人全てが自然に頭を垂れる。瑞気が漂っていた。



沖・中両宮奉賛会長、中村村長、遠藤組合長、弘江組社長他関係者、これに酒の神の松尾神社の祭典に相応しく筑前各地の酒造会社、販売店から代表者が参列し、厳粛に祭典を斎行、夫々玉串を捧げて終了した。

同社は間口一・五米、奥行一・八米、建坪約一坪。屋根千木までの高さ四・二米銅板葺流造りで、材は台檜である。

因みに現在までの松尾神社の経緯を尋ねると

大正末期までは同社は岡境神社と称されていた。

昭和の頃より京都嵐山の麗に鎮座する酒の神松尾大社の主祭神中津姫神は宗像大社中津宮の神を祀ったもので、中津宮は酒の神の本宮にあたる事が世に喧伝され、全国酒造家の厚い崇敬を受ける事となった。この時に芳醸講が結成され北海道から鹿児島に至る各地の酒造家からの信仰は現在も続けられている。この頃逆に中津宮境内に松尾社を祀って欲しいとの要望が澎湃と湧き起り、岡境神社に松尾大社の神を合祀して社名を松尾神社に変更した事が知られる。

昨年八月十八日、同社御解体工事に際して、

棟木下のあおりに

明治三十八年五月廿九日作る
大工 田嶋村 井上市三郎
市 作

棟木には
大正十三年七月八日起工十八日
竣工
屋根屋 小山富次郎
箱崎 高宮 晧見
宮里忠〇郎
大 工 田島 井上 市作
矢部 平

とあり、他の資料と併せ考えると明治十五年、同三十八年に修膳、大正三年屋根葺替、同十三年屋根を銅板に葺替えた。

この後五十余年の歳月が流れ、風雨と白アリに損傷された社殿は倒壊の恐れが出てきた為、今回の御造営となった次第である。

井上 義夫
宮膳主任 主典 嶺 春雄

皇霊殿遙拝式斎行

皇霊殿遥拝式は三月二十一日（春分の日）午前十時、葦津宮司以下全神職参列の下、厳かに斎行。宮司よりうやうやしく玉串が奉奠された。

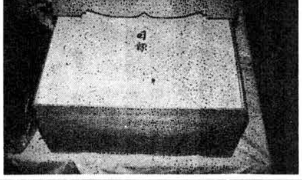
皇霊殿は宮中三殿の一つで、神武天皇以下歴代の天皇の霊が祀られており、天皇陛下が春秋二季にお祭りをなされるもので、全国神社では、これに併せて遥拝式を行う慣しになっている。

玄海七浦の新若布献上さる
―早春の玄界灘より採取―

早春恒例の若布献上の儀が去る三月七日、葦津宮司以下三名により無事おこなわれた。

この若布献上は宗像大社海洋神事奉賛会より「皇居賢所」「天皇・皇后両陛下」「皇太子・皇太子妃殿下」へ郡内七浦で採取した早わかめを献上申し上げているもので本年で十五年目を迎えた。

早わかめは厳寒の海に入り採取した後、真水で一枚一枚丁寧に洗浄され板の上に並べ天日に干して謹製、さらに選別され大社に納められた。大社ではこれを更に厳選し最良品を木箱に納め、目録を浄書の上献上申し上げたものである。



三月七日午前十時宮内庁に赴き入江侍従長に葦津宮司より「宗像七浦漁民が真心込めて採取した早若布であります」と奏上の上、同待従長を通して陛下に献上申し上げた。更に賢所へも献上申し上げた。午前十時四十分、東宮御所に赴き、黒木待従長を通して皇太子・皇太子妃殿下に献上申し上げ、本年度の若布献上を無事終了した。

―◇　◇―

若布献上奉仕
宗像大社宮司 葦津嘉之
宗像大社権祢宜 石橋清寿
福間漁協組合長 井本仙一郎
津屋崎漁協組合長西地善蔵

献上若布採取者表彰
福間漁協 徳永四郎
広渡伊之助
津屋崎漁協 魚住弥蔵
浜 又蔵
神湊漁協 高橋福督
永島豊彦
地ノ島漁協 壱岐翁輔
中村哲介
大島漁協 河辺 徳
船越駒男
鐘崎漁協 七田十郎
白石太一
以上

【祭典案内】
沖津宮現地大祭

当大社沖津宮大祭を左記の如く斎行致しますので、参拝希望の方は御連絡下さい。

記

一、日程
1 五月二十六日午後六時中津宮にて、宵宮祭斎行。
2 五月二十七日午前六時大島港出発。午前九時沖ノ島到着。午前十時祭典。午後一時沖ノ島出航。午後四時大島港着。（渡海船大島→神湊十六時二十分・十七時五十分）

二、要項
1 参拝者は沖津宮奉賛会費として一名五千円を納めて下さい。
2 五月二十六日は大島にて斎泊。宿泊、食事は各自御手配下さい。
3 人数に制限がありますので参拝者は神社で希望者の中より厳選の上決定致します。
4 申込書、参拝心得等用意していますので返信切手同封の上神社に申込み下さい。

残筆しがらみ草紙
玄陽隠士 (16)

五百円亭主の習性

ひと頃、安サラの別名に百円亭主があった。週刊紙の流行語ともなって、毎朝の出勤時に、山の神から授けられる小使銭を大切に懐中したのである。そこに安月給が生む淡い悲哀が感じられた。

物価高は昼のラーメン代に百円を通さない。昇給した通り相場が五倍の値上り、ここに五百円亭主の登場となったわけである。

コーヒーうどんカレーライス等の昼食費の外に、この亭主族の主要な出費に、毎朝駅の売店や煙草店で求めるスポーツ新聞がある。

何種かのスポーツ紙、よく売れる。五十円だが五百円の中から払って、大きな支障はない。

電車バスで、よく読んでいる。日本に来た外国青年が「この国はスポーツを見るのでなく読んで楽しむ」と驚いたそうだが、勤務があっては球場には行けない。また入場料も安くはない。観て楽しむ海外人よ、笑ってくれるな、わが輩の名は五百円亭主である。

Eじはじめ世界中から白眼視される円高と輸出、その波に乗ったわけでもあるまいが、各国をうろつく観光バカ。そんなアニマル指弾をうけずにすむスポーツ新聞愛読の五百円亭主の習性は、山の神のご機嫌を損ずることもなく、ラーメンの味にも影響はない。

プロ野球、相撲、そんな処が興味の中心らしい。気にかかるのは競輪競馬である。銀座裏で昼食休みにフダを買って放送される競走結果の発表を待つ風景を、隠士は上京の際行きつけのそば屋の窓からよく見かけたものである。

日曜日に何とかして入手した金を握り競馬場に駈けつける連中は、安サラの身分では油断がならない。隠士の倅にもその仲間がいる。自惕にならぬが、時折大まちがいをやって、若い嫁を嘆かせ困らせることがあるらしい。

生んだ親の責任と言ってきたのでもないが、嫁の困窮を憐れんで婆は何がしかの送金で嫁を援助したらしい。月給袋から通勤バス財布まで、飲んで正体なく眠り込んだ電車の中、すっかりやられたのである。競馬か競輪の帰り、敗けた気分転換に縄のれんの梯子酒はよく効く。正気で終点までたしかであろう筈がない。

倅をやかましくも言えるのは婆の方で、隠士にその資格はない。思い出す若き日。月給袋こそ盗られないまでも、飲んで車中に眠り込んだ失敗は何度か記憶する。或る時は、終電車の安着を心配した中学二年後輩に当る刑事が、途中まで送ってきたこともある。刑事の護送なら、スリもカッパライも手は出すまい。

瓜の蔓にはなすびは生らぬ。とりわけ親の悪い点はよく似る。親子の決定的証拠などと強調すれば、メンデルが笑うだろう。

毎朝スポーツ紙を買う五百円亭主の習性解明が、とんでもない失敗記録にまで飛火したが、どれを取り上げても天下の形勢を左右する程の問題はない。読むスポーツに始まる一日、映写を楽しむゴルフに終って平穏無事。五百円亭主の場合それでよいとする。

ところで話の焦点をスポーツ紙の魚信欄に当てる。この頃、素人の釣り熱は盛んなものとなった。研究に研究が重ねられ、釣り場の探索もゆき届いて、本職そこのけの大漁天狗も現れている。金曜頃の魚信欄に記事が多く、成果が写真版にまでなるのはスポーツ紙に限らない。

芸は身を助ける。魚釣りの芸というより若い頃の遊びが、今日生活の本業となり、しかも各新聞などの引ッぱりだことなって鼻高々の人を知っている。やり手の弁護士を父に持ち学生時代ぐれて勉強せず、釣りに夢中になった。漁夫でない素人の釣りで飯は食えない。ブラブラの長年月が過ぎた昨今、幸いなるかな釣りブーム。釣り人口は莫大の数に上る。

洋々たる海波を見渡し、新鮮な空気を吸って都塵喧燥を離れた一日、釣れても釣れなくても健康にはよい。然し、慣れて深入りし、成果を上げたいばかりに危険を冒す者もあると聞く。何の道でも凝って限度を忘れてはならないが、海流相手の釣りは殊に格別。

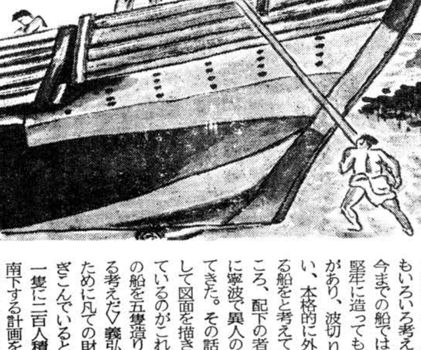
金に物を言わせて、海外にまで出かけて派手な観光アニマル振りを撒きちらすよりも、五百円亭主の習性に忠実な方が無難である。玉砕だ、殉国だと絶讃し、慰霊だ、遺骨だと弔魂する墓参集団は、すっかり観光バカの見物に代って、岸壁の母の嘆きは深刻である。

神湊（こうのみなと） (77)
楠 早鳥 作
福田 長庵 画

帰去来（その六）

才市の船は翌朝兵庫の港を出帆した。左に淡路島をみながら上げ潮に乗り船脚を早めた。舷側にもたれて移り変る対岸の景色を眺めている明継のよこに才市が立った＜村上義弘はさかんに大船を造っているが何の目的か探って来いと大内の館の言伝てがありました＞明継は義弘から聞いた国外脱出計画の回答を目の前につきつけられた思いがした。いずれにしても因島に立寄って是非の返事はせねばなるまいと決心した。

家島諸島を通り小豆島をすぎると多島海に入った。複雑な潮の流れを才市は水手を指揮してたくみな操舵で渡って行く。船橋に、仁王立ちになり帆の上げおろし、舵のむきまで凡て一人で采配をふるう才市を見て、明継は今更ながら航海の難しさを知った。同時に一時代の平穏を求めて熟練した海人たちを多数国外に流出させる義弘の計画が、果たしてこの国の将来にどんな影響をおよぼすかと疑問を抱いた。



忙しさが一段落ついた頃をみはからって船橋に登って行き、水手が一人前になるにはどれ位の年数を要するかと才市に尋ねた。＜さあ、勘のいい奴で十年、それよりも問題は本人が海にむいているかどうかです＞更に言葉をついで＜この様に島を見ながら船を操るのは誰でもやれますが、果てしない大海の中を漕いで行くのは、水手一人々々の小手先の腕よりも、最後に残るのは度胸だけです。本当に胆の座った奴を三十人ほどかかえて居なければ明国あたりまで渡れるものではありません＞成る程、そんなものか所詮俺は大陸の人間だなと自戒しつつ＜村上の手の者たちは普段は何をして暮している＞と問うと＜彼奴らは普段は平凡な漁士ですが、ひとたび陣触れの鐘がなると、そのまま刀や槍をひっかついで漕ぎだして来まさ＞流石に先祖代々海で生きている連中です＞と才市は応えた。

順風にのって夕刻、船は生口島との間の水道を通り因島に着いた。その夜の招宴で村上義弘は別に明継の返事を求めなかった。宴もたけなわとなった頃、義弘は＜面白いものを見せよう＞と言って、黒い箱をとりよせた。箱の上蓋をとると白い盤の上に東・西・南・北と方位が書かれてあり、その交差する中心の軸の上に南・北にかけて鉄片がかかりわずかに小刻みに震動している。

＜見ろ、これを！＞歓喜を顔一杯にひろげて義弘が叫んだ＜一体これは何だ＞明継の問いに＜以前遇然の機会から宋の沈括という男が書いた夢渓筆談という本を読んだことがある。その中に彼の国には方位を示す磁石と名附けた道具があることが記るされていた。かねがね此れを求めていたがつい先頃やっとの思いで手に入れたものだ、これと先年見せた地図があれば俺の図南の策もあながち夢ではなかろう＞有無を言わさぬ気魄で義弘が語った。

翌日は、馬を駆って島の裏側の鏡浦に案内すると言う。道の要所々々には人を配して警戒が厳しい ーえらい見張りが厳重だなーと問いかけようとすると、義弘が馬を止めて下を指さした。海には間隔をおいて兵船が点々と千隻ほど浮び、浜辺では今、大船が建造されている。大勢の人夫たちが忙しげに立働いている状況を目の中に納めて＜型がちがうな＞と言う明継のつぶやきを耳聡くとらえて＜俺もいろいろ考えたが、今までの船ではいくら堅牢に造っても水洩れがあり、波切りも弱い、本格的に外洋を渡る船をと考えていたところ、配下の者が幸いに寧波で異人の船を見てきた。その話を基にして図面を描き造らせているのがこれだ。この船を五隻造り海を渡る考えだ＞義弘はこのために凡ての財力を注ぎこんでいると言う。一隻に二百人積みこみ南下する計画を聞くと明継はこの考えの壮大さに驚嘆すると同時に義弘の輩下に対する愛情に心打たれた。

怖らく船団による渡海は十数回に亘って行われることになろうが、その間の連絡はどのようにするのか、と明継が疑問をなげかけると義弘は無雑作に＜鳩を使うのよ＞と答えた。なるほど鳩の帰巣本能を利用するとは考えたな、そう言えば寧波を訪れる商人等は、船に鳩を飼い故郷の通信に使っていると聞いたことがある。明継はまた改めて用意の周到さに驚き、次第にこの計画に引きこまれて行く自分を感じた。

昭和五十三年度 宗像大社 責任役員・氏子総代会開催

◇責任役員会開催

—昭和五十三年度予算決まる—

去る三月二十三日午前十時から昭和五十三年度分の予算審議を中心とした責任役員会が、当大社会議室に於て開催された。

会議に先だち、各部課より提出された予算案を、近年の経済的不況の動向を勘案して、あらゆる面で慎重に検討審議をした。その結果を修正、経理部で作成、昨年より若干上回る予算案書を作成郵送した。当日は先づ、代表役員である当大社の宮司より、社頭の現況を含んだ挨拶が行われ、引続いて本題に入った。

当日出席の役員各位より幾多の質疑、厳しい意見がなされたが、審議の結果、作成した予算案書通りに、全役員の承認をうけた。

◇氏子総代総会開催

春季大祭も間近い去る三月十七日午前十時より、当社清明殿に於いて、昭和五十三年度の氏子会予算案・同氏子納金取りまとめ依頼・春季大祭・氏子奉幣使選任等について氏子総代総会を開催し、種々検討審議された。

当日は、中村氏子会長を始め郡内総代八十余名出席、当社より章津宮司以下八名の関係職員が出席、定刻通り開催された。

先づ中村氏子会長挨拶、章津宮司より当面社務現況について説明がなされ、斎藤氏子会幹事長の進行により当日の議題に入り、氏子会活動方針を決定する重要な会議で総代各位より活発な質疑があり左記の通り議決された。

一、昭和五十三年度氏子会予算

歳入は氏子納金（百円×九千戸）九拾万円、繰越金拾万円、預金利息壱万円、合計百壱万で歳出は祭典費七拾万円、事務費四万円、会議費八万円、旅費拾万円、諸支出費（西日本菊花大会氏子会賞々品代外）八万円、予備費壱万円合計百壱万円

一、氏子納金取りまとめの件

各部落総代にて取りまとめ、会費は年間百円（前期五十円、後期五十円）

春秋大祭時納金

宗像町吉武校区 高山智氏

その他春季大祭日程等について係職員より説明が加えられ議事を終了した。会議終了の後斎館に於いて直会を行い、和やかな雰囲気の中に午後一時過ぎ散会した。

なお今総会議事に入る前に昭和四十六年製作の映画「神々はよみがえる」を上映好評を博した。

話題の新車をみる (三)

ニュー・サニー・シリーズの巻

新しいサニー・シリーズは、昨年十月二十五日発表され、十二月二十一日全国一斉に発売されたが今回は四代目、型式名称は「B三一〇」の登場となった。

誕生以来のサニー生産累計は凡そ四七〇万台。その中、乗用車だけでも国内で約二〇〇万台売られ、今回一六〇万台が走っていると云う。輸出累計は約一九〇万台、「カローラ」には及ばないが、「サニー」も日本を代表する屈指の量産車である。

メーカー側によると、「上級車と違って、大衆車のサニーは①小回りがきき（最小回転半径が四、三米性能）、②求めやすく維持費の負担がかからない車でなければならない。従って、B二一〇型の良点は継承。そこで③スタイルの変更④五三年排出ガス規制への適合⑤防錆処理とか内装のカラー・コーディネーションといった輸出先からの要望⑥運転性や乗り心地、高速域での騒音低減—などを主眼にモデルチェンジした」と云う。

新しいB三一〇型シリーズ構成は、一六〇〇の「エクセレント」がなくなった以外、ほゞ旧型B二一〇型と同じ。エンジンは一二〇〇ccと一四〇〇ccの二本立て。車種は、2ドア・4ドアの「セダン」、ハッチバックをもつ「クーペ」、それに「バン」がある。

スタイリングでは、「パイオレット」に極めて近く、直線を基調にしたノッチバックのセダン、ハッチバックのクーペ然りである。

セダンには、旧二一〇型のイメージが幾分か残されているが、クーペはガラッと変わり「パイオレット」や「オースター」のクーペに近く、或は「カローラ」や「スプリンター」のLBに近いと云えそう。

ホイールベース二三四〇ミリはB二一〇型のまま、全長三九九五ミリ、全幅一五八〇ミリ、全高セダン一三七〇ミリ、クーペ一三四〇ミリの寸法はほゞ二一〇型なみ。しかし、室内は従来型車に比べ、室内長で三〇ミリ、高さ一〇ミリ、幅では七〇ミリも広くなっている。また、室内では、安全かつ快適な居住性のために窓は大きくされ、加えてエンジンフードやトランクリッドやベルトラインを下げた結果、前後左右の視界が全体的に一七%向上した。

エンジンは、A一二A型とA一四型、そして新登場のEGI（電子制御燃料噴射装置）を加えた3機種。五三年排出ガス対策を機に①A二一型はパワーアップ、一二三七cc、七〇馬力、最大トルク一〇、二Kmに変貌。②A一四型は一三九七cc、八〇馬力、最大トルク一一、五Km③A一四EFI型はコンピューターが走行状態を瞬時に捕え適正な燃料噴射量を定めるもので九一馬力を発揮。また燃費については、一〇モード燃費で、一二〇〇が一五、五Km／ℓ、一四〇〇はAT仕様で一一km／ℓと発表されており、燃費経済性としても悪くないと判定できる。

× ×

話題をひろう

〃季節のおとずれ〃

桜花爛漫の季節となり、全国各地で〃花見の話題〃を伝える時期であろうが、今年は天候不順のため、低温の日々が多かったせいか、そのニュースに接することが少ないようだ。

沖縄地方では、すでに「花見」も終り初夏の候となったようであるが、当地はようやく桜もほころびをみせ、花見もおおにぎわいの観がする。

山菜料理が食膳をかざっているようだが、春の味覚の「ツワ」「フキ」「ワラビ」「ゼンマイ」等も多くでまわり、食卓の話題も豊富である。

境内周辺や釣川ぞいは、休日を楽しむ参拝帰りの家族連が、「つくしとり」で終日賑いをみせている。

また玄界沿岸部は、「ワカメ」「ひじき」の海藻類の収穫期に入り、出荷作業に日夜おおわらわとのことである。

昭和五十三年度 宗像大社奨学生決る

昭和五十三年度、宗像大社奨学生は、福岡県内の各公立・私立高等学校入学試験合格発表が全て終了した三月末に、郡内七中学校より推選のあった左記の方々が自出度合格され宗像大社奨学受給生と決定されました。

◇昭和五十三年度奨学生

大島中学校出身

岩永賢幸（県立香椎高校）
田中幸広（県立香椎高校）

津屋崎中学校出身

緒方尚美（県立宗像高校）
赤間正和（県立宗像高校）

福間中学校出身

中野幹子（県立宗像高校）
橋本清治（県立宗像高校）

玄海中学校出身

福田裕之（公立古賀高校）
深田あけみ（県立宗像高校）

日の里中学校出身

吉武政治（県立福岡高校）
松本元（県立福岡高校）

中央中学校出身

鎌田薫（県立宗像高校）
山口章子（県立福岡高校）

城中学校出身

仁田原克則（県立宗像高校）
山下重香（県立宗像高校）

以上（敬称略）

尚、左記により昭和五十三年度奨学生奉告祭並に二・三年生との合同懇親会を執り行います。

記

一、日時 四月二十九日（天皇陛下誕生日）、午前十一時
一、祭典 宗像大社本殿
一、会場 宗像大社斎館

以上

!!玄海第一・二分団に最新鋭消防車配備さる!!

—火魔退治の入魂式斎行—

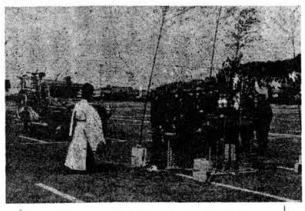
第一分団 消防自動車入魂式

玄海町消防団第一分団の消防車入魂式は三月三十日、当大社大駐車場に於て厳粛裡に斎行された。

当日、午前十一時、新たに配備された消防自動車は、祈願殿にて修祓をうけた後、交通安全の神符が奉戴された。引続き駐車場南側に斎場が設けられ、四本の忌竹に真新しい注連縄が張り廻らされ、消防自動車を中心に消防団員、玄海町々長高橋半三氏を始め地元有志多数参列の下、厳かに「入魂の儀」と共に団員の団結と安全の祈願がなされた。

特に、この第一分団は旧田島校区に属し、国宝・重要文化財等を多数有する当大社の神域・建造物の直接の警備・防災の任にあたるもので、新しい優秀な機能を備えた消防自動車の配備によってその活躍が大いに期待される。

尚、従来の車庫が手狭になったために、此度新たに大社駐車場北側に新設される事になっている。



第1分団祭典模様

第二分団 消防自動車入魂式

去る三月十八日午後一時半より第二分団に配置された消防自動車の入魂式が、旧池野小学校跡の広場で斎行された。

これは玄海町が消防の威力を増す為、新しく消防自動車二台を購入し、玄海町池野地区を受持つ第一分団にそれぞれ配置されたため行なわれた。

当日は雲一つない好天に恵まれた為、山と田畑に囲まれた広場一帯は一層のどかさを増していた。

広場には神幡（ひもろぎ）が立てられ、その回りに注連縄が張られ、消防自動車がとめられた。

祭典開始時刻の午後一時半には高橋半三玄海町町長、梶木幸夫玄海町消防団長をはじめ議会、消防関係者が多数集まり整列して参列した。

祭典は厳粛に斎行され、宗像大社の御神幡が、この車を守り、平素は住民に安堵を与え、万が一にも火がおこった場合は、道行く人も乗っている人も事故がなく、その威力を十分に発揮して、火を素早く鎮めるよう祈りが捧げられた。

祭典後、旧講堂において参列者一同そろって直会の楽しい一時を過した。

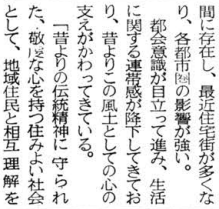
なおこの消防自動車はエンジン三九五〇cc、長さ五米二二糎、幅一米八〇糎で、車は日産、ポンプは森田ポンプの製品である。

〃神郡宗像を守る〃

—無事故・無犯罪を期す—

去る三月の警察人事で大幅な異動が行なわれたが、此の度宗像警察署の署長さんも交代され、後任として益田信二氏が新署長として赴任され、早やひと月がすぎた。

春の交通安全運動旬間の御多忙にも拘らずインタビューに気軽に応じられ、新任地での抱負を述べられた。



「宗像地方は、古くから神郡宗像と称せられ、日本の柱である犯罪のない地域として尊ばれてきた。今後共この地域に住まわれる方々と、協力しあいながら、交通事故がなく、犯罪の発生がない明かるい町として発展させていきたい。」

当地域は、北九州と福岡との中間に存在し、最近住宅街が多くなり、各都市圏の影響が強い。

都会意識が目立って進み、生活に関する連帯感が降下してきており、昔よりこの風土としての心の支えがかわってきている。

「昔よりの伝統精神に守られた、敬虔な心を持つ住みよい社会として、地域住民と相互理解を図り、助け合いながら郷土発展に努力していきます。」と決意の程を述べられた。

益田署長さんは、県民としての誇りを有する一人として、この地を守る郷土愛にたけた保安官としての姿勢を持ちつづけ生活していかれる。

又、正義感感、燃えた動きが、お話のふしぶしに感じられ、一緒にこの地で社会生活をする者としては、今後の御活躍がたのしみである。

益田署長さんは、昭和二十三年に警察官を拝命され、各地に赴任されてこられた。

昭和五十年三月に、城島署長となられ、その後福岡県警察本部の管理・監察・交通等内部の仕事を多くされてこられ、今度現場の署長として宗像署にこられた。

三潴郡大木町の出身であられる。

又、村田好登前宗像警察署署長さんは、二年間神郡宗像で奉職されたが、今度県警察本部の能率管理課長を拝命されこの地を後にされた。

皆様方の御期待にそう、住みよい福岡県の形成に努力されることと存じます。

五月祭典案内

辺津宮

一日 月次祭 午前十一時
五日 五月祭（五月宮）
浜宮祭（浜宮宮）
子供祭
各年前十時より
十五日月次祭 午前十一時

中津宮

一日 月次祭 午前十一時
五日 子供祭 午前十一時
十五日月次祭 午前十一時
二十六日 午后六時
沖津宮現地大祭宵祭

沖津宮

一日 月次祭 午前十一時
五日 子供祭 午前十一時
十五日月次祭 午前十一時
二十七日 沖津宮現地大祭 午前十一時

宗像大社 歌会詠草

第二〇一回

武丸 原田 リノ
往還の裂け目に今年また蕗吹くたんぽぽに触りて郵便局に行く

福岡 林 まつえ
世を変い子孫案する小さき春もみ神の摂理を信じて安し

東郷 藤崎 辰子
遠浪に日は照りながら海苔篠を越えゆくあさの潮の膨み

吉武 白木うめの
木梯子をのぼりて枝打つ杉檜木水あげをりて春の息づく

津丸 藤田 肇
咲き充ちてあえかに香る鶯梅の一枝を賜びて音が庭に挿す

田熊 力丸 一郎
聳えたる鎮守の森の大銀杏年刻みゆく若芽萌え初む

深田 中野 節子
山寺の参道をゆくわがめぐり雪ふりしきるかすかな音

武丸 立石 昇
冬眠より醒めし鯉らは投入れし餌をもさぼりて喰ぶ小春日の朝

武丸 立石ろせ乃
新婚のこころをこの地に住みぬたり潮の香のたつ朝夕なりき

田島 楠 理
新雪を踏むと降りし庭の面すでに雀の足跡のあり

古賀 長岡 憲子
かん高く吠える犬とて嫌われし二日吠えずして我慢ゐるも

古賀 吉武 邦夫
故里の釣川土堤に紫のせんだんの花いまも咲けるや

宗像大社歌会 俳句作品集（一八三）

津屋崎　井浦　良介
選果場過ぎても蹤き来る春の犬

福間　広渡一寿軒
残雪や戸樋に滴る春の音
早春や園児のはしゃぐ梅の園

土穴　八尋　恒夫
今も尚思い出多き小豆飯

田熊　安部　ゆき
春麗や一筋道を陽に向ひ
小買物老いても楽し日脚伸ぶ
客馬車に揺られし旅や春めけり

田島　吉武　武雄
遥かなる征野偲びて喜寿の春

藤沢　玄　洋子
春焼や夢かうつつの鳥の声

福岡　力丸ゆずる
春の夜や嫁ぐ娘の語りつきもせで
慶びも涙もありて春晴衣
嫁きし娘のほのかな香り春の部屋

田熊　力丸　一郎
川土手に土筆摘む子等風光る
樟若葉大社の池の鯉の群

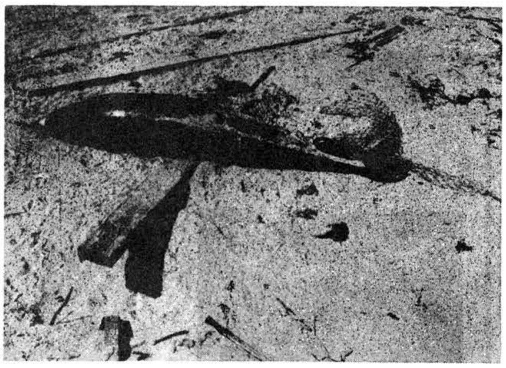
浜の寄物（九）

近頃の漂着

いしいただし

今回は玄界の最近の寄物について述べてみたい。

●三月十九日、宗像郡津屋崎町勝浦浜を歩いていたら、プーンと腐臭が鼻につく。なにか死骸があるなと思っていたら カラスが舞っている。近寄ってみると、波打ち際のところに、半ば砂に埋もれてイルカの死骸があった。頭部だけでも四〇センチほどあり、胴部は腐れて、白い肋骨が出ている。ゴンドウイルカ科であった。三月二八日には遠賀郡芦屋町芦屋浜で、長さ約一五〇センチ、マイルカ科が打ちあげられていた。近くにオサガメの死骸も半ば砂に埋もれていたが腐敗はひどかった。三月二九日、福岡市東区海の中道を歩いたが、ここでは二頭が打ちあげられていた。二メートルほどのマイルカ科と、三メートルはあるゴンドウイルカ科であった。これは腐敗がひどく内臓がとび出ていた。このようにイルカの死骸が多く見られたのは、恐らく、二月二三日、壱岐で千頭が捕獲屠殺され、そのほとんどがコンクリートやブロックをぶらさげられて海上に投棄されたものが、腐敗してこの沿岸に流れ寄っているのであろう。ちなみに、三月二九日には対馬でも百頭、四月四日には、またもや壱岐で百頭が捕獲されている。



漂着しはじめたイルカ

●遠賀郡芦屋町文化財指導員をされている鈴木長敏氏から、昭和五〇年に、芦屋沖で漁師が大きな骨が網に引っかかり、現在、芦屋小学校へ保存しているが、町では収蔵庫を作る計画があるので、何の骨であるかをはっきりさせたいということであった。骨は幅四五センチ、高さ三〇センチ、長さ八〇センチ、色はちゃ褐色を呈し、一部には珊瑚のようなものが付着していた。石化が進んでいる。骨がどの部分かは分らないが、多分、鯨ではないかと思うが—。

●鈴木氏から聞いた話であるが、昭和四四年頃、遠賀郡岡垣町の海に面した砂取り場で カヌーが見つかったそうである。長さ約四メートル、ラワン材らしいものを刳り貫いたもので、彫刻などほどこした見事なものであったというが、土砂採取をしていた人が運び去ったそうである。この種の丸木船は各地に漂着しているようで、島根県美保神社にも、昭和初年に近くの浜に流れ寄ったものを収蔵している。伊豆諸島考古学研究会の橋本尚武氏の教示では、静岡県の登呂博物館にも、伊豆半島に漂着した丸木船を収蔵しているそうである。三重県の鳥羽にある「海の博物館」にもこれは漂流かどうか分らぬが、南方の丸木船が展示されているし、神戸商船大学の海事資料館にも、フイリピン東方海上で拾いあげられた丸木船が収蔵されている。西村朝日太郎氏の「海洋民族学」には、氏が八重山群島の黒島でみた丸木船が写真入りで記述されているが、海流に乗って流れ着いたものであろうとされている。

漂流物ではないが、昨年末、大阪の万博会場跡に開館した国立民族学博物館には、一九七五年サタワル島から沖縄海洋博会場まで三〇〇〇キロを航海をしたチェチェメニ号が展示され、見るものをある種の感動に誘う。

●最近、籐（とう）の漂着が多い。籐はヤシ科のツル性で、別名をロタンとも呼ぶ。バスケットやイスなど、籐で編んだ家具は最高級に属するが、この原材が流れつくのである。長さ一メートルから三メートルまで、だいたい二メートル前後のものが多いようである。だいたい加工するためには裂いた、割籐にするが、これが裂かないままのものより多いようである。分布は熱帯アジアからオーストラリアにかけてであるが。日本には台湾から多く輸入しているそうである。この籐の漂着についてはその原因や流出地なども少し調べてみたいと思っている。

鐘崎民俗誌 その二

楠本記

間（ま）たらずの舟

明治年間、鐘崎で「間たらずの舟」が用いられたことを宗岡立木先生から伺い、久田市三郎さん（明治二十八年生）をお訪ねした。以下はその聞書である。

「間たらずの舟は、普通の舟がおもて・どう・なか・とも、と四つに分れているのに対して、おもて・どう・とも、と三間しかない小舟のことを言っていました。長さは三尋、巾は四尺ぐらいの小舟でした。乗組は船頭と私と二人で風のない時は二丁櫓で漕ぎ、風がでると帆をあげて走りました。帆は片帆で木綿製、これをメリケンと呼んでいました。柱は本帆と弥帆と二本準備しました。長さは本柱が三間半、小柱が一間半くらいありました。風が強い時は短い方の小柱を立て、やわい時は長い方の本柱を立てて航海をしました。

私がこの舟に乗って朝鮮まで鰆（さわら）採りにでかけたのは、十七才の時です。船頭は権田万二郎さんといって当時三十才位で、気は短かかったが胆の太い、道具作りの上手な人でした。舟に持ちこんだものは、帆・錨・舵・ミザワ（竿）・蒲団・簀がえを入れた柳行荷で、蒲団と柳行荷はともの甲板の下にいれました。

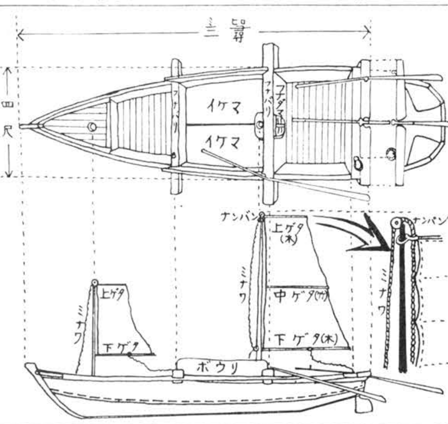
明治四十五年八月のはじめ、東しらみ（早朝）に鐘崎をでました。五・六艘ほど類船（同伴船）がいたと思います。航法は今のように立派な羅針儀があるわけではなく島から島を見ながら渡りましたがただ船頭が小さな磁石を一つもっていました。それでも、その日の夜には対馬の船越の入口に到着しここで一夜を過しました。翌日は万関の瀬戸を渡り向う側で日和まちをしました。幸い日和にも恵まれ鐘崎を出て三日目には朝鮮に着きました。キューレンポを根拠地にしてフサン・サンシンポ・モッポと鰆をとってまわりました。行って見て驚いたのは、僅かばかり大小はありましたが、百艘ほどの舟が鰆とりをしていたことです。遠方の舟では明石の舟が来ていたのを覚えています。当時は大きい鰆一本が四十五銭ぐらいでした。鰆で舟が満船になると、林兼の母船が集めにきました。母船は林兼と山上と二つありまして、鰆とりの小舟はどちらかに所属をしていました。後になって思うと、それぞれの船頭が林兼なり山上と契約を結び、傭とわれていたようです。こうして、八月から師走いっぱい鰆とりをしましたが、寒い日は飲料水を入れている水樽が凍りついて一日中水がのめず辛い思いをしたこともあります。師走の二十九日チャンシンポを出て帰路に着きましたが、帰りは風が強く類船ともはなればなれになり、元日に船越につき二日に対馬をはなれて鐘崎に帰りました。時化の間は、船頭は一日中舵をはなせませんので私は立って帆のけたを握って引張っていました。先に帰った類船が心配して迎えにきたそうですが、行き違いになり鐘崎の方では、私たちの舟が遭難をしたと大騒ぎをしたそうです。まったく舟の安全は一寸太りと言うとおりです。

翌大正元年も中村千吉さんの舟で八月から十二月まで行きましたしかし、この漁はあまりもうけがなかったらしく五・六年位しか続かなかったようです。

その頃、間たらずの舟に乗っていた人は
魚住　仁三　（八十六才）
岩瀬　秀吉　（八十三才）
の二人がお元気です。」

この話によると「間たらずの舟」は南鮮の沿岸で一〇〇艘あまり操業していたことが解るが、北鮮の元山附近でも 鰆とりが 盛んであった。

大島村の上野清助さん（七十六才）の話によると、子供の頃、台湾行きのバナナ船に 長さ三・四尋、巾五尺から五尺三寸くらいの小舟を三十隻ほど積みこんで 鰆とりに出掛けていたそうである。また、久田市三郎さんも小舟を積んだバナナ船が元山の港の中で沈んだ話を聞かれたということである。



〔年中行事〕

礼法（れいほう）

礼法というと、今日では「日常の作法」を指していうことになっているが、本来はもっと広い意味を持っている。わが国では応神天皇のころから次第に大陸文化の影響をうけ 特に奈良時代にはわが礼法は随・唐の様式によって整えられた。

まとまった典籍としては当代には見られないが、聖徳太子の「十七条憲法」をはじめ詔・勅・制・令にしばしば礼法に関するものが見られる。平安時代に入ると先ず「弘仁格」「内裏式」等が 見られ、ことに後者には当時の宮廷儀礼が明らかにされている。これ以後続いて出た「貞観儀式」以下礼法関係の典籍は枚挙にいとまなく、宮廷礼式はこの時代に完成されたのである。

一方、当時武士・庶民は生活程度も低く、勢力も微かでとり立てていうほどの特殊な礼法も持たなかったが、鎌倉時代に入ると、源頼朝が武家勢力を結集したので、ここに幕府の礼法、武士の作法が確立された。「貞永式目」は鎌倉幕府の礼法の骨幹である。

しかし「吾妻鏡」以下に見る当時の武士中には、まだまだ粗野な者が多かったようである。建武中興のころ、信濃源氏の小笠原貞宗が後醍醐天皇に仕え、弓馬礼法の細部を規定した。貞宗の礼法は、禅宗の「百丈清規」等に強く影響されたものであるが、その著といわれる「神伝糾方修身論」六十四巻は、その後小笠原流礼法の肝要として今日までその影響を及ぼしている。

貞宗の子政長は足利尊氏に仕え、伊勢氏（—伊勢流礼法）と相並んで幕府の礼を司ったが、徳川家康が幕府を開くにあたっては、小笠原流を用いて武家礼法を指導させたので、江戸三百年間礼法すなわち小笠原流という 形となった。明治の初めに礼法は大いに乱れたが、明治十三年（一八八〇）に小学校に礼法を採用したころから次第に復興した。ただ江戸時代までは男子が主として修めたが、明治以後は女子中心となり、今日に及んでいる。

伊勢流礼法

伊勢氏は桓武平氏、貞盛の玄孫盛光から出た家で、室町幕府の初めから大いに勢力をのばし、代々幕府の政所職をつとめ御所奉行を兼ねたので、室町幕府の殿中の礼法を悉くこの家に伝え、世に内向と唱え、小笠原の外向に対したのであった。

室町時代の末に家道衰えたが、江戸時代になると、本家は幕府の旗本に召出されて復興し、その礼法も次第に普及した。殊に江戸中期に伊勢貞丈が出て博聞強記数百巻の著述をなし、多くの門人を養成したので、以後は小笠原流と相並んで、武家礼法の世界に抜くべからざる勢力を有するに至った。

小笠原流礼法

小笠原氏は清和源氏、新羅三郎義光の玄孫長清より起った家である。鎌倉時代から代々弓馬の道に秀でたが、礼法において頭角を顕わしたのは長清六代の孫貞宗の代である。

貞宗が後醍醐天皇に仕え「神伝糾方修身論」を著わしてから礼法の家となり、室町幕府では外向（そとむき）すなわち営外の諸礼一切を司ってきた。戦国の乱に家が衰えたが、江戸時代の初め秀政が徳川家に忠勤を励み、子孫は別家と合わせ五藩の大名となった。

徳川幕府には貞宗の弟貞長の子孫である小笠原縫殿助と、長清の末子清経の子孫小笠原平兵衛の二家が仕え、幕府の弓・馬・礼法を司り、諸大名もまた当流に従ったので、武家礼法はほとんど小笠原流で統一された。

明治維新後縫殿助家が絶えて現在は平兵衛家が弓馬礼法の宗家として続いている。小笠原流の礼法は起・居・進・退・坐・作・周・旋の稽古からはじめて、歩法・拝法・物品進撤の基礎、陪侍、周旋・進饌・飯食の法、元服・婚礼等の式に及び、さらに書札礼・言語礼・紙包・結方等に至るまで、その教程甚だ深遠である。しかもその修業は甚だ厳重で、起居進退は、最初に習ったことを十年、二十年と反復するので、礼法練達者の態度は全く一つの大芸術である。礼に通ずれば上に畏れず下に誇らず、時・所・位に応じて宜しきに適することができる。

今日の礼法は新たに洋式を加えたところもあるが、弓馬の礼・軍陣の礼等現代不用の部分を省いているので、旧幕時代と比べれば遥かに狭いが、なお一通りを窺うのに二、三年を要するであろう。

◇三月社務日誌◇

一日
月次祭斎行
臼杵運送（株）宗像神社月次祭
出光興産（株）徳山製油所中野常務取締役、庄子取締役参拝

二日
孔大寺神社祭

三日
筑紫豊氏外二名宗像文書調査の為来社
益田信二宗像警察署長赴任挨拶の為来社

四日
中津宮末社松尾神社遷座祭斎行

六日
献上若布奉告祭斎行

七日
若布献上
野上会館神籬遷座祭斎行

八日
出光興産（株）福岡支店加納総務課長参拝

十日
出光興産（株）門司支店松山新支店長、内田旧支店長参拝

十一日
静岡県清水市鎮座宗像神社丸尾宮司外神社総代五名参拝

十三日
出光興産（株）福岡支店泰井業務課長参拝

十五日
月次祭斎行
玄海町成人学級（短歌）閉講式

十七日
宗像大社氏子総代会開催

十八日
玄海町消防団第二分団消防車入魂式
出光石油化学（株）加藤社長参拝
野田宇太郎氏参拝

二十一日
皇霊殿遥拝式
祖霊社祭

二十三日
宗像大社責任役員会開催
風俗・浦安舞温習開始

二十五日
宗像菊友会発会式 於斎館

二十六日
東京教師会百四十名参拝
主基地方風俗舞保存会結成総会開催

二十八日
関西ヤマザキ福岡工場安全祈願祭奉仕

三十日
玄海町消防団第一分団消防車入魂式
地元総代春祭準備作業奉仕